

『存在と時間』におけるハイデガーの真理概念 ——トゥーゲントハットの異議に対する各種応答——

君嶋泰明

0. はじめに

『存在と時間』(以下 SZ と略記)においてハイデガーは、「存在するとはいかなることかを理解する」という仕方で存在している存在者、すなわち現存在(Dasein)の存在理解を分析し、この存在理解を可能にする超越論的地平としての時間を取り出すことを目指した。本論は、この SZ の 44 節(a)を主に取り上げ、近年の解釈状況を整理することを試みる。「現存在、開示性、真理」と題されたこの節は、既刊の限りでの SZ の前半部をなす、上述の現存在分析を締めくくる重要な節であり、また、SZ 以降も一貫して展開される「真理(Wahrheit)」の問題の重要な一局面でもあることから、今なお多くの論者によって様々な解釈が試みられている。

本論が試みるような「整理」が必要となるほどこの節に多様な解釈が寄せられるのは、上述したような重要性にもかかわらず、この節がそうした多様な解釈を許す曖昧さを残しているためである。解釈史上、この曖昧さを最もラディカルに指摘したのは、Tugendhat (1970) である(初版は 1966 年)。ハイデガーの真理論に関心を寄せる者で、このことに異論を挟む者はいないだろう。実際、本論が取り上げる論者たちも、大なり小なり同書の異議を叩き台として自らの解釈を形成しているのである。

そこで本論は、まずトゥーゲントハットともに 44 節(a)を再構成し、この節に残る曖昧さがどの点にあるのかを洗い出す(1 節)。そのさい、そこで提示されるハイデガーの真理概念に対する、トゥーゲントハットの異議をも確認する。この異議とは、ハイデガーによって新たに定式化される言明の真理は、真理の資格を持っていないのではないか、というものである。この異議が今日においても一定の説得力を持っているのは、上述したように、この節にある曖昧さが残っているためである。これに対して、本論が取り上げる三人の論者は、ハイデガーの真理概念を擁護することを試みる。まずブラッサーは、SZ のテキストに内在的に、ハイデガーの真理概念が維持できることを示してみせる(2.1 節)。次にラットホルは、後年になってハイデガーが回顧的に述べていることに従って、トゥーゲントハットのものとは異なる解釈の仕方を提示する(2.2 節)。最後にゲートマンは、SZ 以前の講義録の内容から、必ずしも明示的でない SZ のプラグマティックな傾向を暴きだし、ハイデガーの真理概念をプラグマティックに理解すれば、トゥーゲントハットが述べるような結論には至らないことを示す(2.3 節)。

1. 『存在と時間』44 節(a)の再構成とトゥーゲントハットの異議

まず、SZ44 節(a)においてどのような議論がなされているのかを簡単に確認しておこう。

その際、トゥーゲントハットがどの点に異議を寄せているのかも併せて確認することになる。この節ではまず、伝統的に「知性と事物との一致 (adaequatio intellectus et rei)」として理解されてきた(とハイデガーが言う)真理観に批判が加えられる。

ハイデガーによれば、この伝統的な真理観は大体次のようなものである。まず、真であるのは認識である。認識は判断である。判断においては、判断するという実在的な過程と、判断されたものの理念的な内容が区別されなければならない。真なる判断において、実在的な事物と一致関係にあるのは、理念的な判断内容の方である。

こうした真理観に対して、ハイデガーは次のように問う。この実在的なものと理念的なものとの一致は、存在論的にはどのようにとらえられるべきなのだろうか。この問いが二千年以上も前から一步も進展していないのは、判断において、実在的な遂行と理念的な内容を存在論的に不明瞭なまま分離しているからではないだろうか。ハイデガーはこのように問うた後で、この区別を放棄し、判断すること自身の存在様式を明らかにすべきだとする。そのために、彼は、判断が真なる判断として証明 (ausweisen) される場面を、上述した区別に立脚せずに、現象学的に分析することを試みる。

この分析は大体以下のように進む。まず、誰かが「壁に絵が斜めに掛かっている」という真なる言明をしたとしよう。この言明は、言明した人が振り返り、壁に斜めに掛けられている絵を知覚することによって、証明される。だが、この証明において証明されるのは、厳密には何であろうか。ここでの言明が、絵を知覚せずに、ただその絵を思念しながらなされているとしたら、この思念と事物の一致が証明されるのだろうか。そうではない。ただ思念しながら言明するときでも、言明する人は、実在的な絵と関係づけられているのである。言明することは、存在する事物自身へと向かう、一つの存在なのである。真なる言明においては、言明された実在的な存在者自身が、「自分自身に即して存在している通りに」自らを示している。したがって、この証明において証明されるのは、「[言明された] 存在者が、この存在者が言明において提示され発見される通りに、自同性 (Selbigkeit) において存在している」(Heidegger, 2001, S.218) ということである。

トゥーゲントハットは、ここで言明の真理の「第一の」定式化がなされたとする。上述したことの繰り返しになってしまうが、念のため彼のパラフレーズを引用しておこう。彼によれば、この第一の定式化とは、「言明が真であるのは、この言明が存在者を、『この存在者が自分自身に即して存在している通りに (so, wie es an ihm selbst ist)』提示し、発見するときである」(Tugendhat, 1970, S.332) というものである。フッサールに依拠して真理を理解する彼は、「提示し、発見する」に加えられたこの「...の通りに (so-wie)」という補足を、「真理関係にとって本質的である」(ibid.) とする。彼によれば、単に思念されただけの事象と、「自分自身に即して存在している」事象自身とを区別することに基づいて、はじめて「真理」という語はその意味を得る (ibid., S.335)。もしこの区別を考慮しなければ、真なる思念と偽なる思念を区別することができなくなってしまうだろう。

だが、彼によれば、この区別は、この第一の定式化が第二、第三の定式化に置き換えられていくなかで、テキストから消え去ってしまう。ハイデガーの第二の定式化はこうである。「言明が真であるということが意味するのは、この言明が存在者をそれ自身に即して (an ihm selbst) 発見するということである」(ibid., S.332)。トゥーゲントハットは、この「それ自身に即して」は上の「...の通りに」を含意していると考えられるので、この第二の定式化はまだ許容できるとする。だが、問題は、次の第三の定式化である。「言明が真である (Wahrsein, Wahrheit) ということは、発見している (Entdeckend-sein) ということとして理解されなければならない」(ibid.)。明らかにここで、ハイデガーは、フッサールの重視した区別から離れ、独自の真理概念を獲得している。ここでは、「[真理関係にとって] 本質的なものをなしている [...の通りにという] 資格が不要となり、真理は提示することと発見することそのものにある」(ibid.) ことになっている。

以上のトゥーゲントハットの異議を理解するためには、言明の真理を規定している「発見」という語が何を意味しているのかを確認しておく必要がある。ここで、トゥーゲントハットからは一度離れて、ハイデガーが「発見」の語をどのような意味で用いているのかを見ておこう。

まず、ハイデガーは、現存在が存在者と何らかの仕方に関わるときのこの存在者のあり方を、「自らを示す (sich zeigen)」という言い方で一元的に理解している。ある存在者を知覚するときも、認識するときも、単に思念するときも、この存在者について何らかの言明をしたり判断したりするときも、この存在者を道具として使用するときも、この存在者は「自らを示す」のである。この「自らを示す」という言い方は、ハイデガーがギリシア語の「ファイネスタイ」という動詞から受け取ったものである。一方、このように存在者が自らを示すためには、現存在の方に、この存在者へと「近づく (Zugang)」能力が備わっていないなければならない。この能力を、ハイデガーは、これまたギリシア語の「ロゴス (語り)」、「アイステーシス (知覚)」、「ノエイン (思考)」などとして理解する。これらの存在者への近づく方に共通しているのは、存在者を「見えさせる (sehen lassen)」ということである。この「見えさせる」も、ハイデガーによるファイネスタイの訳語である。彼はこのように、現存在の存在者との関わりを、現存在が (ロゴスなどの) 能力を行使して存在者へと近づき、この存在者を「見えさせ (ファイネスタイ)」、この存在者の方は「自らを示す (ファイネスタイ)」こととして、形式的に理解している。そして、こうした関わりにおいて自らを示す存在者は、「現象 (ファイノメノン、自らを示すもの)」となる。

だが、ハイデガーによれば、「現象」と一般に訳されるこの「ファイノメノン」には、古代ギリシアにおいては、「仮象」という意味も含まれていた。この仮象とは、「自分自身でないものとして自らを示す」もののことである。要するに、単純に何かを錯覚する、見間違ふときなどに生じるものである。ハイデガーは、この現象と仮象の区別に基づいて、ロゴスが真である、偽であるとはどのようなことかを説明する。それによれば、「ロゴスが『真で

ある』とは、[...] 存在者を、隠されていないもの (Unverborgenes) として見えさせること、つまり『発見する』ことを意味する」(Heidegger, 2001, S.33)。他方、ロゴスが「『偽である』とは、[...] 何かをそれでない何かとして偽称することである」(ibid.)。ここでは、トゥーゲントハットが問題にする「発見」という語が用いられている。上述したことと併せて考えるなら、この「発見」とは、(上述したどの能力を行使するかに関わりなく) 総じて存在者を(仮象と区別された)現象として見えさせることということになるだろう。ひとまず、ここでは「発見」をこのように理解しておこう。

だが、実はハイデガーにおいてこの「発見」の用法は一貫していない。上では存在者を現象として見えさせることのみに用いているように見えるが、別のところでは、(トゥーゲントハットが指摘するように)「仮象という様態の発見されていること」(ibid., S.222)という言い方がされているからである。こうして、トゥーゲントハットは次のように結論づける。「したがって、[...] 偽であることの特定の意味と、真であることの特定の意味を規定する可能性は、全く残されていないのである」(Tugendhat, 1970, S.333)。

以上をまとめるなら次のようになる。まずハイデガーは、ある言明が真であるということ、単にその言明が存在者を発見していることとして規定している。だが、この規定によってハイデガーの真理概念は意味をなさなくなった。なぜなら、(1)「発見する」という語は、一方で存在者を現象として見えさせることにあてられていながら、他方で仮象として見えさせることにもあてられている。(2)したがって、「発見する」という語を用いて言明の真理について語りたければ、「それ自身に即して存在している通りに」という補足が不可欠となる。(3)だが、上の規定においてはこの補足が抜け落ちている。これら(1)～(3)のことが容易に見て取れるからである。ゆえに、「言明が真であるということは、発見しているということとして理解されなければならない」という定式化は、言明の真理の規定としては不適格なのである。

果たしてトゥーゲントハットの以上のような異議は正当なものだろうか。次節では、この異議に対するいくつかの応答を確認しよう。

2. トゥーゲントハットの異議に対する各種応答

2.1 ブラッサーの応答:『存在と時間』に内在的に

ブラッサーはまず、大前提として、次のことを確認する。すなわち、SZ44 節 (a) においては、「壁に絵が斜めに掛かっている」という、事実として真なる言明が現象学的に記述されているだけである (Brasser, 1997, S.123)。これを踏まえて、上で見た 44 節 (a) の議論を思い出そう。そこでは、(1) 誰かが「壁に絵が斜めに掛かっている」という真なる言明をする。(2) 同じ人が、壁に斜めに掛かっている絵を知覚することによって、この言明を証明する。この二つのモーメントが描かれていた。この(1)から(2)への移行を第三者的に記述しようとする「外部の」視点からすると、(1)の前にすでに絵が壁に斜めに掛かって

いたということは当然妥当している。ブラッサーは、こうした外部の視点は、真なる言明の「論理」にも対応しているとする。この「論理」とは、絵は、(2)においてだけでなく、(1)においても、あらかじめ斜めに掛かっていた、というものである。ブラッサーによれば、このように言明の対象が言明が述べる通りにあらかじめ存在していることは、「言明の真理の必要条件」(ibid., S.124)である。このように考えるならば、事柄として妥当なのは、言明においていかようにも自らを示す存在者が、あらかじめ存在していた通りに自らを示すのは、他でもなくそうなるように言明するときである、ということになる。そうだとすれば、(トゥーゲントハットが懸念するような仕方です)「存在者の自己存在 (Selbstsein) が、この存在者への近づき方 (Zugang) に不当に依存させられることはない」(ibid.)。なぜなら、存在者がその自己存在において自らを示すのは、この存在者がそのように自らを示す近づき方で、この存在者に近づくからである。要するに、「存在者が近づき方に従うのではなく、近づき方が存在者に従う」(ibid.)のである。

では結局、トゥーゲントハットが問題にする、「言明が真であるということは、発見しているということとして理解されなければならない」という定式化や、「仮象という様態の発見されていること」という記述は、どのように理解すればよいのだろうか。ブラッサーは以上を踏まえたうえで、これらに説得的な答えを与えている。まず前者への答えから見ていこう。本節の冒頭で述べた大前提を思い出そう。SZ44 節 (a) の目標は、「真なる言明」の現象学的記述なのである。このケースでは、そもそも、言明する人は、この存在者が自分自身に即した存在の仕方ですら自らを示すように、この存在者に近づいているのである。ハイデガーは、言明のこうした「特殊的な近づき方」を、「発見」と呼ぶのである。したがって、「発見」の語にはすでに、それが近づく存在者の、「非依存的なそれ自身にとっての存在 (Für-es-selbst-Sein) が、ともに含み込まれている」(ibid.)のである。

では、「仮象という様態の発見されていること」という記述についてはどうだろうか。これは今まさに確認したと矛盾する記述ではないだろうか。これにはブラッサーは、「発見されている状態は、言明の最終目標ではあるが、この目標が事実として達成されているかどうかの基準ではない」(ibid., S.115) という答えを与えている。どういうことか。まず、真理基準を問うことは、或るものへの近づき方がこの或るものを発見しているかどうか、を判別しうる指標への問いである。だが、ブラッサーによれば、ハイデガーは、「[...] 基準の問いへの答えを、事実上放棄しているばかりか、原理的にも放棄している。なぜなら、真なる言明のこうした様式にとって、この様式が真であることの普遍的基準はないからである」(ibid.)。ブラッサーはこの理由を二つ挙げている。(1) 或るものが現象になること(発見すること)は、各人の「主観的な」経験であり、また各人のそのつどの状況に応じて別の仕方ですら生じうるからである。「[存在者が] 自らを示す過程の個別性は、普遍化と、それとともに基準論を妨げる」(ibid.)。これは要するに、或るものについて、この或るものの私にとっての現象と、同じものの他の人にとっての現象が異なっているということが、彼によるこの

或るものについての言明によって判明した場合、私には彼の言明の真理を否認することが、原理的にできない（否認するための基準がない）、ということである。（２）或るものが自らのほうから自らを示すこと（発見すること）は、原理的に不可謬ではないからである。44節(a)の例で言えば、言明した人が振り返り、壁に絵が斜めに掛かっているのを見たとき、この人はこの絵を発見したかもしれない。だが、後からこの人が見間違いをしていたことが分かるという可能性を、誰も排除することはできない。発見したと思ったが実は発見ではなかった、現象だと思ったが実は仮象だった、というこのケースにおいては、「発見されていること自身も、もう一度『仮象という状態で』与えられうるのである」（ibid.）。

以上をまとめると次のようになる。まずブラッサーによれば、「言明の真理の必要条件」として、言明したときにはすでに壁に絵が斜めにかかっているものでなければならない。そして、絵があらかじめ存在していた通りに自らを示すのは、そうなるような近づき方で近づいているからである。ハイデガーは、「発見」をこうした「特殊的な近づき方」に限定して用いているのであり、したがって、真理があらゆる言明に拡張されることはない。さらに、「仮象という状態の発見されていること」という記述に対しては、ハイデガーにおける真理基準の原理的な不可能性を示し、現象（発見されたもの）が実は仮象であるということもありうるとする。ブラッサーは、このようにして、トゥーゲントハットの異議を退けている。

2.2 ラットホルの応答：『存在と時間』以降の視点から

ラットホルの議論に入っていく前に、ハイデガーの術語に関する基本的なことを確認しておきたい。本論の1節で、「ロゴスが『真である』とは、[...] 存在者を、隠されていないものとして見えさせること、つまり『発見する』ことを意味する」というハイデガーの記述が引用されていた。議論のいらぬ拡散を防ぐため、引用文の最初の部分と中間部分を省いておいたのだが、実はこの引用文の最初の「ロゴス」には、テキストでは「アレーテウエインとしての」という補足がついている。つまり、引用文は、「アレーテウエインとしてのロゴスが『真である』とは、[...]『発見する』ことを意味する」となっているのである。このギリシア語のアレーテウエインという動詞は、隠蔽を意味する「レーテー」に否定の接頭辞である「ア」を組み合わせた作りになっており、何かを隠されていないもの（Unverborgen）として見えさせることほどの意味である。ハイデガーはここではこのアレーテウエインの訳語に「発見する（entdecken）」をあてているわけだが、このドイツ語の方も、「覆い隠す」という意味の「decken」に逆接の接頭辞である「ent-」を組み合わせたもので、作りも意味もアレーテウエインに対応している。

さて、ラットホルによれば、ハイデガーはSZ以前のマールブルク講義からかなり後期に至るまで、「真理（Wahrheit）」と「非隠蔽性（Unverborgenheit）」という語を、アレーテアを翻訳するために互換的に用いていた。だが彼は、最晩年期（1964年）の著作『哲学の終わりと思案の課題』において、「アレーテアの、つまり非隠蔽性そのものを問うこと

は、真理を問うことと同じではない」として、自らこの互換的な使用を禁じる。ラットホールによれば、この「アレーティア＝非隠蔽性」は「真理の可能性の条件」(Wrathall, 2002, p.3)であり、この非隠蔽性そのものを真理と呼ぶことは、ハイデガー自身が回顧的に自戒しているように、SZにおいても誤りである。なぜなら、ラットホールの見るところでは、ハイデガーは初めから「アレーティア＝非隠蔽性」を真理の可能性の条件として定義していたからである¹。このことから、ラットホールは、SZにおいて「真理」が「アレーティア＝非隠蔽性」の意味で用いられているときは、この「真理」は真理の可能性の条件を意味しているとする。つまり、SZにおいて「真理」は二義的に用いられているというのがラットホールの考えである。以下では簡便のために、「真理の可能性の条件」の意味で用いられる(とラットホールが考える)真理は<真理>と表記することにしよう。

ところで、上で見たように、この非隠蔽性は、「アレーテウエイン＝発見」されていることである。「言明が真であるということは、発見しているということとして理解されなければならない」という言明の真理の規定に異議を唱えるトゥーゲントハットは、当然、「アレーティア＝非隠蔽性」をそのまま真理と考えている。だが、SZにおいても「アレーティア＝非隠蔽性」を<真理>と考えるラットホールからすれば、トゥーゲントハットは、後年のハイデガーが認める「誤り」を犯している。したがって、この異議そのものも外的なものとなっている。では、ラットホールはSZ44節(a)をどのように解釈しているのだろうか。彼は、トゥーゲントハットが問題にした第一、第二、第三の段階的な定式化を、言明の真理の再定式化の過程としてではなく、「命題的真理の分析から非隠蔽性におけるその基盤への移行」(Wrathall, 2002, p.5)としてとらえるべきとする。そのうえで、彼は、最後の定式化である「言明が真であるということは、発見しているということとして理解されなければならない」という文の「真である(Wahrsein)」を、「言明が真である能力の『存在論的条件』—言い換えれば、『言明が真か偽であるための可能性の条件』」(ibid.)と解する。そして、彼は三つの定式化で言わんとされているであろうことを次のようにパラフレーズする。「言明の真理が、存在者をそれ自身で存在している通りに発見することであるなら、言明が真である[Wahrsein]ということは—言明が真である可能性の条件は—言明が発見するということである」(ibid.)。

さて、このラットホールの解釈は、前節で見たブラッサーの解釈とは相当に違うものとなっているが、一点だけ共通していることがある。それは、言明の真理を、言明された存在者と「世界の存在の仕方との一致」(ibid., p.10)として理解しているということである。ラットホールは、言明の真理をこのように理解し、この言明の真理の可能性の条件は、次の二点にあるとする。(1)言明の内容が世界内の諸事物によって固定されるためには、それらの諸事物が、われわれに自らを示さなければならない。存在者に自らを示させるのは発見である。(2)発見を可能にするのは、世界の開示性(Erschlossenheit)である。ハイデガーが説明するように、「あらかじめすでに開示された世界が、世界内部の存在者が出会われる

ことを可能にする」(ibid., p.12)。

したがって、ある言明の内容が固定され、それが真か偽であるためには、すでに言明が発見的であり(つまり何らかの仕方で世界内部の存在者が自らを示しており)、存在者を発見するためには何よりもまず世界が開示されていなければならない。ラットホールはこのような理解を裏付けるために、ハイデガーがSZで述べている言明の三つの特徴を持ち出す(ibid., p.14)。それは、言明は、(a)存在者を提示し、(b)述語づけることで規定し、(c)他者に伝達する、というものである。これらの特徴は、いずれも、上の(1)と(2)の条件が満たされていなければ可能ではない。まず、(a)が可能であるためには、言明にとってすでに何らかの仕方で存在者が近づけるようになっていなければならない。また(b)は、存在者の性質を、この存在者の各種性質の中から選び出さなければならないが、これが可能であるためには、あらかじめこの存在者の各種性質が、発見されていなければならない。最後に(c)が可能であるためには、あらかじめ他者と間主観的に世界を共有していなければならないが、これはこれであらかじめ世界が開示されていることによって可能となる。

以上をまとめると次のようになる。まず、ラットホールは、後期ハイデガーの視点から、真理の可能性の条件としての「アレーティア＝非隠蔽性」を発見と結びつけることで、トゥーゲントハットが問題とする第三の定式化を、言明の真理ではなくその可能性の条件を述べたものと解釈する。「アレーティア＝非隠蔽性」がどのような意味で言明の真理の可能性の条件であるかは、上で述べた通りである。ラットホールは44節(a)をこのように解釈することで、言明の真理にとって本質的な(第一、第二の定式化ではまだ残っている)「...の通りに」という補足を確保し、トゥーゲントハットの異議を退けている。

2.3 ゲートマンの応答:『存在と時間』以前の視点から

ゲートマンは、彼のキャリアを通して、一貫してハイデガーの真理概念をプラグマティックに理解しようと試みている。彼は、近年われわれの手の届くところとなった、SZ以前のフライブルク、マールブルク大学での諸講義を、自らのプラグマティックな解釈を補強するものとして参照する。彼によれば、ハイデガーは、これらの講義を通じて、すでにフッサールにおいて萌芽していたプラグマティックな傾向を、「一貫したプラグマティズム」(Gethman, 2002, S.39)へと押し進め、「操作的真理モデル(das opelationale Wahrheitsmodell)」なるものを獲得した(以下で詳述)。ゲートマンによれば、SZ44節(a)における言明の真理は、この操作的真理モデルに基づいて理解すべきであるのだが、トゥーゲントハットは、SZに暗黙裏に潜むこのプラグマティズムを取り逃がしてしまっている(ibid., S.41)。以下では、ハイデガーがどのようにして操作的真理モデルを獲得したのかを確認し、ゲートマンがこのモデルに基づいてどのようにトゥーゲントハットに応答しているのかを見る。

1925/26年のマールブルク大学冬学期講義において、ハイデガーは、フッサールによる心理学主義批判のメタ批判を展開している。フッサールの心理学主義批判とは、一言で言え

ば、判断遂行と判断内実を区別せよ、というものである。だが、ハイデガーは、こうしたフッサールの反心理学主義は、それと知らずに（それゆえ不当に）「実在的／理念的」という伝統的な存在論的区別を前提しているとする (ibid., S.27)。この批判は、次のような別の批判とパラレルなものである。それは、フッサールは、「構成するもの／構成されるもの」という方法的区別と、「自己／世界」という存在論的区別を同一視している、というものである (ibid.)。ゲートマンによれば、これら二つの批判から、「ハイデガーのフッサール批判の一般方針」(ibid.) が抽出されうる。それは、フッサールは、方法的に正しいとされた区別（上の例では「遂行／内実」、「構成するもの／構成されるもの」、あるいはフッサール自身の言う「志向／充実」など）と、存在論的伝統によって受け継がれてきた区別（上の例では「実在的／理念的」、「自己／世界」など）を、無批判に同一化しているというものである (ibid.)。ハイデガーによれば、現象学的方法的区別は、こうした伝統的解釈から解放され、形式的で無差別なものではなければならない (ibid.)。

ゲートマンによれば、フッサールのこうした誤りに対し、ハイデガーは、現象学の「志向／充実」という形式的な方法的区別を取り入れつつ、さらにアリストテレスを解釈するなかで、操作的真理モデルを形成した。フッサールが、何かについての思念（志向）とその知覚的直観（充実）の一致を真理としたのに対し、このモデルでは、真理は、何らかの「計画（志向）とその実現（充実）の間の合致関係」(ibid., S.39)、すなわち行為の成功である。（ゲートマンの理解する）ハイデガーは、このように常に何かを計画し、それを実現すること、つまり行為の成功を積み重ねていくことを、人間の最も基本的なあり方と考える。そして、この人間のあり方に対応して、世界の方も、つねにすでに、その計画の実現のための「有用性（Dienlichkeit）」(ibid.) として構成されている。この構成は、世界の内部の存在者が、「...のためのものとして（つまりある目的のための手段として）」解釈されることを意味している。このように何かを「...のためのもの『として（als）』」解釈することを、ハイデガーは「解釈学的『として』構造」と呼ぶ。この「解釈学的『として』」は、ある行為がその行為の課題に前言語的に合致することを表現している」(ibid., S.40)。こうした「行為の成功＝解釈＝世界＝真理」は、人間が存在している限り、アプリアリに構成されている。ちなみに SZ においては、この世界のアプリアリな構成は「開示性」と呼ばれる。

では、この操作的真理モデルに基づく、言明の真理はどのように理解されるのか。言明がそれについて述べようとする何らかの状況は、上述のように、計画とその実現、課題とその解決の合致において、暗黙裏にあらかじめ解釈されている。ゲートマンによれば、この状況について言明することは、「状況に関して、したがって課題の解決に関して、適切であるということを、状況から距離を置いて確認すること」(ibid., S.41) を意味する。状況の先行的な解釈をこのように表立って取り上げる言明の構造を、ハイデガーは解釈学的「として」構造と区別して、「命題的『として』構造」と呼ぶ。この命題的「として」は、解釈学的「として」を明示的に表現したものにはかならないので、「基礎をなす状況において手

段が目的を現実的に達成しているとき、言明は真である」(ibid.)。

だが、操作的真理モデルにおける真理は、言明に先行する非明示的なものであり、この真理を表立って表現したものにすぎない言明は、あくまで派生的な意味において真が偽である。ゲートマンによれば、ハイデガーは、この派生的な言明の真理は、証明を必要とすると考えていた。その根拠として、彼は 1925/26 年冬学期講義の次のような一節を引く。

したがって、知識や語りが、何かを伝えるか伝えずに何かを意図するかにかかわらず、本来的に自らがそれであるところのものであるのは、そこにおいて自らの正当性を証明し、自らの言うことを正当に言っているのだということを示すところのものに基づいてのみである。正当に[言うのは]——事象のあり様をその通りに言うとき[である]。しかし、私がそれについての知識を持ち、それについて語る事象が、必然的かつ常に直接的にその場にあるわけではない限り、あるいは、私自身が事象自身のもとにいるわけではないかぎり、われわれの知識や語りは、広範にわたって、結局は常に証明を必要としている[...]。(ibid., S.38)

このように、「ハイデガーは『証明』という着想に固執している」(ibid.)というのがゲートマンの考えである。彼は、次のように結論づける。

したがって、ハイデガーの叙述によれば、言明が存在者を、それが存在している通りに発見するのは、厳密には、言明が証明の手続きに基づいて得られていたときである。真理は証明の手続きの最後の仕上げである。そして証明されるのは、対応する言明が、行為の文脈に、鍵が錠前に合うように合致するときである。(ibid., SS.41-42)

このように、ゲートマンは、言明の真理を、言明に先行するプラグマティックな真理を明示的に表現したものであるとする。そして、ある言明が実際に行為の文脈に合致しているかどうか(つまり何らかの課題の解決を表現しているかどうか)は、証明の手続きを踏まなければ分からないとする。こうしたゲートマンの解釈が正しいならば、トゥーゲントハットの異議は的を外したものとなっている。なぜなら、彼の読みでは、ハイデガーは、証明を言明の真理にとって本質的なものとは考えていないということになるだろうから。

3. おわりに

以上、SZ44 節 (a) をめぐる、トゥーゲントハットの異議と、それに対する各種応答を概観した。トゥーゲントハットの異議がいまだ現役であることと、彼の異議を軸にして多様な解釈が展開していることが見てとれたことでもって、ひとまず本論は満足し、それぞれの解釈が含む問題点や筆者自身の考えについては、他稿に期すことにしたい。最後に、今後の課題を述べておこう。本論は、言明の真理について論じる SZ44 節 (a) に焦点を絞り、(b)(c)

において展開される開示性の議論には深く立ち入らなかった。実は、トゥーゲントハットはこの (b)(c) に対しても異議を唱えており、この異議に対しては、例えば Dahlstrom (2001)² が独自の立場から応答している。この応酬は、44 節にとどまらず SZ 全体およびその後の展開までを視野に入れたものであり、紙面を改めて考察する必要がある。

註

¹ ラットホールの解釈態度について一言述べておきたい。ラットホールは、ハイデガーの初期と後期の思想の連続性を疑わない。例えば、彼は「真理と非隠蔽性が同じ外延を持った命題性質ではないということは、言明は存在者をその存在において発見することなしに真でありうる、というハイデガーの観察によってさらに示されている。」(Wrathall, 2002, p.5) と言う。だが、彼がその根拠として引き合いに出すのは、1953 年の講演「技術への問い」における言明の「正当性 (Richtigkeit)」という概念である。だが、少なくとも SZ からそのような視点は引き出すことはできない。Wrathall (2002) の主張は、全体として、こうした後期から初期への視点の持ち込みによって形成されている。

² ダールストローム (Dahlstrom, 2001, pp.414-423) は、トゥーゲントハットの「ハイデガーは、彼が遂行したような [真理概念の] 深化と拡張は、批判的証明の理念の放棄を必要とすると考えていたのかもしれない」(Tugendhat, 1970, S.405) という記述に対し、ハイデガーがカントと同様の超越論的論証を意図していることを説得的に示して見せる。だが、本論は主に言明の真理、とりわけ「言明が真である」を「言明が発見している」に還元することに対するトゥーゲントハットの異議に焦点を当てるものであって、ハイデガーが超越論的論証の対象とする「真理の最も根源的な現象」(Heidegger, 2001, SS.220-221) としての開示性にまで立ち入ることはしなかった。

文献

Brasser, M. (1997). *Wahrheit und Verborgenheit: Interpretation zu Heideggers Wahrheitsverständnis von "Sein und Zeit" bis "Vom Wesen der Wahrheit"*: Königshausen und Neumann.

Dahlstrom, D. O. (2001). *Heidegger's Concept of Truth*: Cambridge University Press.

Gethman, C. F. (2002). 'Die Wahrheitskonzeption in den Marburger Vorlesungen,' in Dreyfus, Hubert L. & Wrathall, Mark A. (Eds.), *Truth, Realism, and the History of Being*, 2 of Heidegger Reexamined: Taylor and Francis, 21–52.

Heidegger, M. (2001). *Sein und Zeit*: Max Niemeyer Verlag, 18th edition.

Tugendhat, E. (1970). *Der Wahrheitbegriff bei Husserl und Heidegger*: Walter de Gruyter, 2nd edition.

Wrathall, M. A. (2002). 'Heidegger and Truth as Correspondence,' in Dreyfus, Hubert L. & Wrathall, Mark A. (Eds.), *Truth, Realism, and the History of Being*, 2 of Heidegger Reexamined: Taylor and Francis, 1–20.